徳洲会グループ
TOKUSHUKAI MEDICAL GROUP

ALL LIVING BEINGS ARE CREATED EQUAL

徳洲新聞

TOKUSHUKAI MEDICAL GROUP NEWS

No.1567

発行
一般社団法人徳洲会
〒102-0074 東京都千代田区九段南1-3-1 東京堂千代田ビル14階
TEL：03-3262-3133

制作
一般社団法人徳洲会　広報部
TEL：03-3288-5580　FAX：03-3263-8125
Email：news@tokushukai.jp

野崎徳洲会病院附属研究所研究員
国際的な学術誌エディターに選任
科研費「挑戦的研究」採択も続々

野崎徳洲会病院附属研究所（大阪府）は、がん転移研究部の山口英樹・主幹研究員が国際的な学術誌のエディター（編集委員）に選任、また、疾患機能ゲノミクス研究部の圓岡真宏・主任研究員の研究課題が科学研究費助成事業（科研費：国が交付する競争的研究資金）の「挑戦的研究（萌芽）」に採択されるなど、着実に成果を上げている。徳洲会グループは臨床医療に注力すると同時に、医学の発展に貢献するため学術・研究活動を推進しており、各専門領域の学術集会の独自開催に加え、個々の病院や多職種が日々の臨床の成果を生かした学術・研究活動に従事。また同研究所を含め５病院が文部科学省から研究機関として指定を受けている（**表**）。

エディターの山口・主幹研究員 がんに関する基礎研究分野担当

山口・主幹研究員がエディターに就任したのは、『Scientific Reports』（シュプリンガー・ネイチャー発行）という自然科学全般を対象としたオープンアクセスの国際的な学術誌。影響度を示す指標であるインパクトファクター（掲載された論文が他の論文で引用された回数によって算出）は 4.9 と高い評価を受けている。長年にわたる研究業績が国際的に認められた結果で、山口・主幹研究員は、がん関連の基礎研究分野を担当する。

「とても名誉なことだと受け止めています。私自身は 30 年近く、がん転移の仕組みやプロセスを解明する研究に取り組んできました。この 15 年ほどはスキルス胃がんや腹膜播種を主な研究対象とし、転移の抑制に効果がある創薬などを目指して研究を続けています。著名な学術誌のエディターを務めることで当研究所の認知度向上に寄与し、質の高い論文を世に送り出すことで科学全体の発展に貢献していければと考えています」（山口・主幹研究員）

エディターの役割は、『Scientific Reports』事務局から依頼された専門分野の論文に対し、精査したうえで、まず論文の内容が同誌のポリシーに合致し科学的な質が保たれているかを確認。次に適切な査読者を選定し、その後、査読者のコメントをふまえて「採択」や「却下」、修正・再投稿を促す「改訂」といった判断を下す。


「質の高い論文を世に送り出したい」と山口・主幹研究員


「発達障害の治療法確立を目指します」と圓岡・主任研究員


野崎病院附属研究所は動物実験施設も有する（写真はマウスに試薬を注射する圓岡・主任研究員）

徳洲会グループの文部科学省指定研究機関

札幌東徳洲会病院医学研究所
千葉徳洲会病院臨床研究部
東京西徳洲会病院臨床研究支援センター
湘南鎌倉総合病院臨床研究センター（神奈川県）
野崎徳洲会病院附属研究所（大阪府）

圓岡・主任研究員は発達障害改善 不要なシナプス選択的除去で検証

圓岡・主任研究員の研究課題は「成熟脳における不要シナプスの選択的除去による神経回路再編と発達障害治療戦略の創出」。シナプスは脳内の神経細胞同士の接合部を指し、生体が複雑な活動を行う際に必要な情報伝達を担う。同研究は発達障害の発症に関与するとされる不要シナプスを選択的に除去し、分子標的アプローチによる治療法の確立を目指す世界初の試み。

挑戦的研究（萌芽）は「これまでの学術の体系や方向を大きく変革・転換させることを志向し、飛躍的に発展する潜在性を有する研究」と定義。同研究所は、継続中の研究課題を含めると現在 12 件の科研費を獲得しており、AMED（日本医療研究開発機構）や複数の民間助成金なども精力的に獲得し、研究活動を一層加速させている。

ヒトの脳内では 2 歳前後の発達期にかけて多くのシナプスが爆発的に形成され、通常は刈り込み（除去）というプロセスを経て、“交通整理”されるように必要なシナプスだけが残る。それが適切に除去されないことが発達障害の発症に関与していると考えられている。発達障害の根治療法はいまだ存在しない。

「本研究では、神経細胞に発現するタンパク質の一種を欠損させた発達障害モデルのマウスを用い、近年開発された不要細胞除去技術（Crunch）を活用して標的シナプスを選択的に除去、従来困難とされてきた発達期の神経回路異常の後天的な改善について、検証を行います」（圓岡・主任研究員）

現在は動物実験の段階だが、研究が進展すれば、将来的にはヒトの発達障害の新規根治的治療法の創出につながる可能性が期待できる。

2029年6月開院予定の新病院
「（仮称）東松戸福祉医療センター」
医療法人徳洲会が新築工事地鎮祭


式典後に列席者で記念写真を撮影

医療法人徳洲会は10月10日、「（仮称）東松戸福祉医療センター新築工事地鎮祭」を建設予定地（千葉県松戸市高塚新田字天神山123-13）で執り行った。式には東上震一理事長をはじめ三角和雄・副理事長（千葉西総合病院院長）ら徳洲会関係者、地元の行政、医師会関係者らが列席した。

神事後、挨拶に立った東上理事長は、新病院について、同じ松戸市に急性期の千葉西病院があることに触れ、同院の機能を補完する形で「地域の方々に一層安心していただけるトータルな医療をお届けできることを祈っています」と期待を寄せた。

また、徳洲会グループの現状も紹介。「北海道から沖縄県まで、日本の各地で医療の拠点をつくりながら、その地域の方々に安心して喜んでもらえる医療を届けたい」という思いを明かし、「今日は医師会の先生も来られています。一緒に力を合わせて、松戸市の方々に良い医療を届けたいと思います。これからも頑張ってまいります」と締めくくった。

その後、地域を代表して松戸隆政・松戸市長が挨拶。新病院に対して「今後ますます需要が増していく松戸市の回復期医療をはじめ、なくてはならない重要な医療機関になるものと期待しています」と切り出し、「引き続き松戸市としても連携させていただきながら、東葛地域（松戸市を含む千葉県北西部エリア）の医療を共に支えていければと思っています」と力を込めた。

新病院は敷地面積２万5,000㎡（7,562坪）。2029年６月にオープン予定。

与論&沖永良部病院
合同QI大会を初めて開催
双方の職員が発表に刺激

鹿児島県の奄美群島にある与論徳洲会病院と沖永良部徳洲会病院は 10 月 17 日、与論病院で合 同 QI（Quality Improvement=品質改善）大会を開いた。QI は、医療の質向上や業務改善などを目的とした活動の成果を発表する取り組み。これまでは各施設で行っていたが、今回、初めて合同での開催を試みた。現地参加と WEB 参加のハイブリッド形式を採用し、両施設から合計 70 人超の職員が参加した。

最優秀賞は松井・与論病院職員 「驚愕のコストダウン」を実現

当日は与論病院が 5 演題、沖永良部病院が 7 演題を発表。参加者による投票の結果、最優秀賞は与論病院の松井直樹・総務課職員が受賞した。演題テーマは「ひそかに続けた『6 手間』と驚愕のコストダウン結果」。出張や研修、応援などにともなう航空券の費用について、株主優待割引を活用したところ、昨年 11 月中旬から約 11 カ月間で 162 万 1,030 円のコストダウンにつながったことなどを発表した。2 位は与論病院の中西愛海看護師と山野海咲看護師（演題名：医療用酸素コスト算定漏れゼロを目指した取り組み）、3 位は沖永良部病院の川添祥・内科医師（演題名：定期処方患者の完全予約制と定期検査導入に伴う外来診療改善への取り組み）、4 位は与論病院の土持智礼・診療放射線技師（演題名：紹介患者さんの在院時間削減に向けた取り組み）、5 位は同院の高杉香志也院長（演題名：インシデントレポート増加の取り組み 医局からの報告 6 倍へ）が受賞した。


現地参加の両職員（前列中央が高杉院長、その右が藤崎院長）。与論島の形を手でイメージ


部署で取り組んだ成果を発表する松井職員

両施設の院長賞も設け、高杉院長は沖永良部病院の森下那海・理学療法士に、沖永良部病院の藤崎秀明院長は与論病院の川上悠理恵助産師に贈った。最後に両施設の幹部が総評し閉会。どの職員も他院の発表を聞いて刺激を受けていた。高杉院長は「困っていることも楽しいことも共有する大変良いイベントになりました」と手応えを示し、「今度は沖永良部病院で」と早くも続ける意向を見せた。藤崎院長も「似た環境なので合同で開く意義は大きい」と手応えを示す。「奄美群島では徳之島、沖永良部島、与論島は南三島と呼ばれるので、徳之島徳洲会病院も一緒にできたら」と意欲的だ。

直言

超高齢社会では病気を早期発見・診断しQOLを守るため日々の診療で積極介入

このパラダイムシフトへの柔軟な対応が要



鎌ケ谷総合病院（千葉県）院長　増井 文昭（ますい ふみあき）

1990年に慈恵医大を卒業後、「軍隊」と言われていた整形外科に入局、同大柏病院の診療部長を8年間務めた後、千葉西総合病院に赴任しました。人工関節・腫瘍・外傷の三足のわらじを履きながらテーラーメードの四肢再建を行ってきましたが、2025年8月末の夕方、鎌ケ谷総合病院に院長として赴任してほしいとのご連絡をいただきました。分不相応に加えて、あまりに急な話であったため、非常に戸惑いながらの11月の赴任となりました。

「人生100年ドック」＆「がんロコモ・骨緩和外来」オープン

当時、当院は心臓血管外科閉鎖による減収、手術件数および外来患者数の減少に加え、11月の医業収入も前年度比で大きくマイナスとなっていました。私自身、これまで手術畑で生きてきたため、経営は全くのド素人であり、考える暇がないまま日々が過ぎていきました。

その後、26年6月に急性期40床、8月に回復期49床の増床を行いました。これまで331床、病床利用率93％前後の病院の病床を「果たして埋められるのだろうか」という懸念の中、まずは医局会で組織体系、理念、そして経営の方向性を再認識してもらい、「職員一人ひとりが行動すること」を重視して、運営を進めてまいりました。東上震一理事長の方針の下、徳洲会は着実に前進しています。「アドバルーンを揚げなければ何も始まらない」と繰り返し伝え、一歩前へ出る組織をつくり、そして病床利用率100％を目指し、チーム一丸となって進んでまいりました。職員のポテンシャルが高かったため、効果は早期に現れ、増床直後の8月末に急性期病床利用率は、100％超となりました。

今後、成人の軽・中等症患者さんは減少し、軽・中等症の高齢者の救急搬送が増加します。日本は世界に誇る長寿国、今や「人生100年時代」と言われる中で、要介護にならずに生活していくことが重要です。健康とは、充実した人生を送るための手段であり、要介護状態になることは人生の質（QOL）を低下させる大きな要因の一つになります。ひとたび病気になると、元通りの健康を取り戻すには、長い時間がかかります。

大病院が病気を治すのは、当たり前の時代になりました。超高齢社会では、病気を早期に発見し、健康と生活の質を守るために、日々の診療で積極的に介入することが求められます。このパラダイムシフトに柔軟に対応していくことが、重要です。無症候性の病態を早期に発見・治療するうえで、公的医療で行われている健診だけでは、決して十分とは言えません。東上理事長も「プラスαの気配りが重要」と述べられています。当院では、ふらつきなどによる転倒で救急受診された患者さんに対し、細かく検査する方針を打ち出し、頸椎損傷、骨転移、軽症硬膜下血腫、未破裂の脳・頸動脈瘤といった無症候性の病態を発見、早期治療へつなげることができました。

数多くの転移性骨腫瘍の治療経験から、転移を契機に“がん”が発見される高齢者は予想以上に多く、人間ドックなどによる早期発見・早期治療の重要性を痛感しています。早期に発見すれば生存率は、高まり、病的骨折する前に見つかれば、手術を回避できる可能性もあります。高齢者が“元気”でいることは、日本社会にも好影響をもたらします。まずは私の専門領域である“がんロコモ”から着手し、「人生100年ドック」と「がんロコモ・骨緩和外来」を開設いたしました。高齢者の予防医療、ならびに“医療と介護の複合ニーズ”は、大規模病院にとってNew Frontierであり、速やかに対応していくことが肝要です。

開腹・腹腔鏡手術とロボット手術両輪体制構築し2040年問題へ対応

今のトレンドに乗りつつ、15年、20年先を見据えた体制も整えてまいります。2040年問題は、徳洲会にとってさらなる飛躍のチャンスです。ロボット手術、脳血管治療、トモセラピーなど先進医療に加え、今後は高齢者救急医療の重要性がさらに高まります。これには総合的に判断して低侵襲な術式を選択することが好ましく、開腹・腹腔鏡手術の重要性を再認識し、ロボット手術との両輪体制を構築していく予定です。残された課題は多く、富士山にたとえれば未だ3合目にいる状態ですが、徳洲会グループの一員として、地域医療に貢献してまいりたいと考えております。皆で頑張りましょう。

神奈川県のグループ7病院

搬送時安全管理を徹底

医療搬送安全対策講習会開く

神奈川県内の徳洲会グループ7病院は9月6日、湘南鎌倉総合病院（神奈川県）で「医療搬送安全対策講習会」を開催した。同講習会は葉山ハートセンター、湘南鎌倉病院、日本救急救命士会「医療搬送安全対策ワーキンググループ」の3者合同企画で、7病院から救急救命士や事務職員ら計34人が参加。座学やグループワーク、実車を使った訓練で研鑽した。



実車を使いストレッチャーの操作方法を学ぶ



神奈川県グループ7病院から34人が参加し研鑽

冒頭、喜熨斗智也・日本救急救命士会会長は、救急搬送件数の増加にともない医療機関の救急車活用が期待される一方、事故防止や安全管理教育が重要になっていると指摘。「本講習を通じ、安全な搬送体制の構築を目指しましょう」と呼びかけた。

講習では、緊急走行時の道路交通法や科学的根拠を学ぶ講義をはじめ、呼称運転やマイク周知などの要点、事故発生時の対応手順などを整理。グループワークでは、ヒヤリハットに関する8事例をもとに、事故原因や予防策をグループごとに議論した後、その内容を共有した。午後の実技では、実車を用いた誘導訓練や急制動、遠心力を体感する同乗体験などを行い、搬送業務にともなう危険性と安全管理の重要性を再認識した。

参加者からは「救急車の後部に実際に乗ることで、走行中の大きな揺れやストレッチャー操作の感覚を体感できた」、「救急車が動かなければ救命活動そのものが成立しないため、オイル量やバッテリーなどの日常点検を怠らないようにしたい」など感想が聞かれた。

企画に携わった湘南鎌倉病院の作田翔平DX推進室兼救急調整室係長は「今回は救急救命士だけでなく事務職員も参加し、職種を超えて安全対策を学べました。地域医療の支えになるべく、多職種連携を重ね、盤石な搬送体制の構築に取り組んでいきたいです」と強調。

葉山ハートセンターの竹内太郎・連携室課長補佐は「今回の学びを生かし、自信をもって安全に搬送業務を遂行したいです」。

藏並・湘南藤沢病院乳腺外科顧問

中学校で“がん教育授業”

湘南藤沢徳洲会病院（神奈川県）の藏並勝・乳腺外科顧問（医師）は9月10日、茅ヶ崎市立浜須賀中学校で「がん教育授業」の講師を務めた。がん診療に力を入れ4月に地域がん診療連携拠点病院の指定を受けた同院に、がん教育を推進する県から協力依頼があった。

体育館を会場に2年生約200人に向け藏並顧問は「少しずつわかってきた“がん”のこと」と題し講義。がんの発生や進行の仕組み、リスクを下げるためにできること、治療法、相談体制など解説し、早期発見・がん検診の大切さを強調した。



がん医療の広範な話題をかみ砕いて講義する藏並顧問

最後に「帰宅後、今日の話をご家族と話し合ってみてください。そして気になることや心配なことがあれば、先生や保健室に相談してみてください」と呼びかけた。質疑応答も活発で盛り上がった。「とても真面目に聞いてくれて生徒たちの真剣さが伝わってきました」と藏並顧問。「教育への貢献も、がん拠点病院の役割のひとつです。機会があれば今後も協力していきたい」と意欲的だ。

「電カル停止時」訓練を実施

南部徳洲会病院



模擬患者に対し、紙カルテを運用する訓練を実施

南部徳洲会病院（沖縄県）は9月15日、院内で「電子カルテシステムダウン時訓練」を実施した。サイバー攻撃などによるシステム完全停止を想定し、カルテの紙運用への迅速な切り替えや診療継続性の確保を検証するのが目的。病棟や外来フロア、コメディカル各部署が連携し、模擬患者への対応手順を確認した。

訓練では、患者取り違え防止の本人確認や伝票作成の手順、各職種の役割分担など、実運用のための多様なボトルネックが浮き彫りとなった。宮城智之・情報システム管理室課長補佐は「単なるマニュアルの確認にとどまらず、実際の紙運用での課題を洗い出すための訓練となりました。万が一の際も地域に対する医療を止めず、患者さんの安全と診療の継続性を確保することが何より重要だと考えます」と強調。

また、同院の訓練がグループ内で少しでも参考になればと考えており、「電子カルテに頼れない状況でも診療を継続できるよう、こうした訓練をすることが大切だと思います。必要であれば、当院のノウハウを共有させていただきます」と呼びかけた。今後は抽出した課題を反映し、マニュアル改訂や運用改善を進める方針だ。

下山・さいたま記念病院副院長

徳洲会リアルワールドデータ研究の成果発表

“腫瘍循環器”と呼ばれる新しい医学領域がある。がん治療の影響などで発症する循環器疾患の予防・治療が研究目的で、2017年には日本腫瘍循環器学会が設立された。徳洲会グループは匿名化した診療ビッグデータを活用し、医学の発展に貢献するため、「徳洲会リアルワールドデータ（TREAD）・プロジェクト」を推進しており、この腫瘍循環器領域でも着々と研究成果を上げている。9月5日から2日間開催された同学会の第9回学術集会では、さいたま記念病院の下山ライ副院長（外科）が最新知見を発表した。

日本腫瘍循環器学会学術集会に登壇

演題名は「Risk Factors for Incident Arterial Thromboembolism in Metastatic Gastrointestinal Cancer: Tokushukai Real-World Data Project (TREAD 07)」（転移性消化管がんにおける動脈血栓塞栓症［ATE］のリスク因子の解析：TREAD 07）。転移性消化管がん患者さんに関して、心筋梗塞や狭心症などの急性冠症候群、虚血性脳卒中、末梢動脈閉塞といったATEの発症に関連するリスク因子について検討を行い、結果を発表した。

下山副院長は2年前の同学術集会でも、ATEを発症した転移性消化管がん患者さんを対象とした研究を発表し、ATEの1年累積発症率（1年間のうちに対象集団のなかから当該疾患を発症する率）は5.2%であり、死亡リスクは約1.5倍になるという解析結果を報告。

さらに昨年の日本臨床腫瘍学会学術集会ではATEの頻度（1.7%）に加え、主要心血管イベント（MACE＝急性心筋梗塞、脳卒中、心血管死、不安定狭心症、心不全など）についても頻度（2.9%）と予後を調べて発表するなど、TREAD 07として継続的に取り組んでいる。



「ATEのリスク因子を念頭に置いて診療を行うことが大切です」と下山副院長

背景には、近年になって注目されてきたものの、静脈血栓塞栓症と比べて動脈血栓塞栓症についての研究報告が少ない現状がある。研究が進んでいるのは主に深部静脈血栓症や肺血栓塞栓症など静脈血栓症だ。

徳洲会は患者さんの診療を通じて得られた貴重なビッグデータの活用によって、あまり開拓が進んでいない研究領域を探索し、得られた知見を還元することで、医学の発展や患者さんへの貢献につなげていく方針。徳洲会の診療ビッグデータは、併存疾患を有する高齢の患者さんなど、市中病院が実臨床で診療する機会の多い症例を豊富に含み、まさしく“リアルワールドデータ”であるのが特徴であり、研究データとしての強みだ。

TREAD07の対象は、2010年4月から2024年3月までに転移性消化管がんと診断された6,580人。ATE発症のリスク因子を調べた今回の研究では、このうち採血データを入手できた4,251人の解析を行った。内訳は食道がん207例、胃がん1,494例、小腸がん60例、大腸（結腸・直腸）がん2,490例。

患者背景や既往歴、採血データなどを解析（多変量解析）した結果、胃がん、糖尿病、高血圧、心房細動・心房粗動、血小板減少がATEの有意なリスク因子として示された。リスクの増加率は、胃がんは大腸がんと比べて110%、糖尿病は97%、高血圧は74%、心房細動・心房粗動は114%、血小板減少は10万減少当たり24%で、病理組織型による影響や相違は認めなかった。

下山副院長はこれらの研究成果を紹介するとともに、転移性消化管がん以外の幅広いがん種に関しても、ATE発症のリスク因子について大規模な解析を行う研究計画があることを示し、発表を終えた。

下山副院長は「転移性消化管がん患者さんに関し、ATE発症と関連性のあるリスク因子を明らかにすることができました。今回の解析データは、ATEの予防や新たな治療戦略を導き出せるものではありませんが、これらの因子を有する患者さんには相応のリスクがあることを念頭に置いて、臨床医は診療に臨むことが大切であるというエビデンス（科学的根拠）が得られたのは一定の成果だと考えています」と振り返る。

続けて「日本腫瘍循環器学会の学術集会は、今回で第9回とまだまだ新しい領域であり、研究の進展が望まれます。がん治療を行う医師と循環器診療を行う医師が、相互に興味をもっていただき、患者さんに、より良い治療を提供していくために、タッグを組んで進んでいけると理想的だと思います」と展望している。

TREAD07の研究成果に関しては、現在、論文を作成中。また今回の発表でも明かした他の幅広いがん種を対象にした横断的な研究は、約3万8,000症例規模の大規模な解析になる見込みだ。

「来年10月には、アジア太平洋地域で初開催となるGlobal Cardio-Oncology Summit (GCOS＝世界腫瘍循環器サミット) 2027が東京で行われます。同サミットで横断研究の成果を発表できればと考えています」と意欲を見せる。

湘南藤沢病院

救急隊員とACS体制など共有 第2回症例検討会を開催し研鑽



「できる限り多くの患者さんを救えるよう尽力」と江原院長

湘南藤沢徳洲会病院（神奈川県）は9月14日、院内で第2回症例検討会を開催した。藤沢市消防局の救急隊員を招待し、“顔の見える関係”の強化や情報共有の促進を図り、地域の救急医療の向上に資することが目的だ。救急隊員や同院職員ら50人が参加し研鑽を積んだ。

会の冒頭、江原宗平院長が「救急医療は徳洲会グループの根幹で、理念そのものです。これからも意思疎通を図りながら、救急隊員の皆さんと一緒に、できる限り多くの患者さんを救えるように尽力してまいりたいと考えています」と挨拶。

症例検討の1演題目は、同院外科／救急総合外科の澤村直輝医長が登壇し、一般外科を基盤とし救急外科や重傷外傷外科などを横断的に担う同院のAcute Care Surgery（ACS）の診療体制や、救急隊員から病院に伝えてもらいたい情報、重症例への手術戦略、実際の症例対応などについて発表した。

2演題目は、藤沢市消防局北消防署警備一課遠藤救急隊の福山里菜隊員が「初期評価で異常がなかった重症頭部外傷」、3演題目は同院の多田啓一郎・初期研修医が「意識障害で救急搬送された心筋梗塞の一例」をテーマに、それぞれ症例の経過や対応など紹介。活発に質疑応答を行って終了した。



澤村医長は湘南藤沢病院のACS診療体制を紹介

最後に同院の菊池豪事務長が「救急搬送された症例の当院での対応など転帰について、顔を合わせて皆さんと共有することは、医療の質の向上を図っていくうえで大変重要な取り組みだと考えています」と、症例検討会の継続に向けて力を込めた。

営業と採用で連携強化

徳洲会の北海道ブロック介護部門

徳洲会の北海道ブロック介護部門は「広報・人材確保部会」を設置し、入居者・利用者さん集めに向けた営業活動と、職員の人材確保活動に連携して取り組んでいる。同部会は2014年に設立し、特別養護老人ホーム（特養）、介護老人保健施設（老健）、サービス付き高齢者向け住宅（サ高住）など5施設・7人で活動。



病院の医療相談員を対象とした施設見学会の様子

人材確保では、道内の介護系高校や専門学校11校を毎年訪問。10年間で19人の新卒職員が入職した。今年度は老健母恋（室蘭市）、サ高住徳洲苑はこだて（函館市）とも連携し、活動の幅を広げている。一方、営業活動では主に医療講演を実施。昨年度は「介護施設の選び方」をテーマに年間15回開催し、計190人の参加があった。

さらに、グループ病院と施設の連携強化を図るため、病院の医療相談員を対象にした施設見学会を企画。今年度は8月21、26日の2日間で行い、6病院から26人が参加した。「顔の見える関係づくりや相談員同士の交流につながった」、「病院間の情報交換の場になった」と好評で、より連携を深める機会となった。

西村隆宏・老健コスモス支援相談員課長は「今後も単独施設では難しい取り組みをブロック内で協力して進め、優秀な人材の確保や徳洲会介護施設の魅力発信に努めたいです」と意気軒高だ。

音信温心

小学生が医療現場を体験 多職種8人が協力し対応

仙台徳洲会病院

当院は9月23日に、地域の七北田公園で開催された小学生向け職業体験イベント「わくわくわーく」に参加しました。開催に向けて看護師、事務職員、研修医の計8人が、職種を超えて体験内容や必要な物品、役割分担などを打ち合わせし、実際に機器を使って体験の流れを確認するなど、本番に向けて準備を重ねました。



看護師、事務職員、研修医が職種を超えて協力



看護師体験では子どもが家族の血圧を測定

当日は晴天にも恵まれ、イベント全体で約1,500人が来場。当院ブースにも300人を超える子どもたちが訪れました。聴診器で心音を聴いたり、ご家族の血圧や血中酸素飽和度を測ったり、ペンライトで瞳孔を観察したり、鉗子を使って小さなおもちゃをつかんだりと、さまざまな体験を楽しんでいました。

職員の説明を聞きながら何度も機器を手に取る子どもや、親子で測定結果を見比べる姿も見られ、ブース内は活気に包まれました。時間帯によっては体験を待つ列ができるなど、多くの親子で終日にぎわいました。

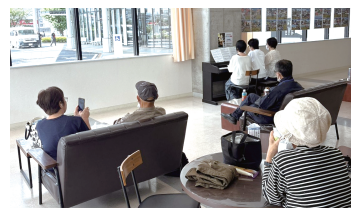
（熊谷綾・看護主任）

主治医への恩返しを込めて 武蔵野病院でピアノ演奏会

武蔵野徳洲会病院（東京都）は10月7日、エントランスホールでピアノ演奏会を開いた。今回は女性3人によるピアノの連弾が人気のユニット、「pianon」が出演し、邦楽や洋楽のヒット曲など計7曲を披露した。正午開演ということもあり、食事の手を止めて手拍子をする患者さんもいるなど会場となった食堂は盛り上がりを見せた。

同院はこうしたボランティアでの演奏会を不定期で実施しているが、まさにpianonがきっかけとなった。メンバーの1人が5年前にがんを患い、当時は都内の大学病院に勤務していた主治医の横山政明・消化器外科部長の手術を受けた。その時の丁寧な声かけや対応に主治医として信頼を寄せ、武蔵野病院に移った後も、健診や診察のため横山部長のもとに通っている。

「武蔵野病院に来るたびに、演奏しています。少しでも先生に恩返しできたら」と笑顔。



3人の連弾による演奏で、にぎわう会場

WEB医療講演スケジュール
Facebookで公開中！

徳洲会グループ病院では、さまざまなテーマで医療講演を開催している。オンラインで受講可能な講演を徳洲会グループのFacebookで公開中。当該病院のホームページで参加方法などを要チェック！

中部徳洲会病院

多様な搬送業務の安全性強化 安全運転センターから感謝状

中部徳洲会病院（沖縄県）は多様な搬送業務を安全に担うため、病院救急車の緊急走行を担う救急救命士を対象に、「一般救急自動車運転技能者課程」の受講を継続して行い、体制強化を図っている。同課程では茨城県の安全運転中央研修所で４日間、座学・実技訓練を受講する。また、同院は消防隊からの救急搬送を受け入れるため、下り搬送などによる病床の確保を強化。こうした取り組みが評価され、自動車安全運転センター沖縄県事務所から感謝状を受け取った。

同院の緊急走行訓練の取り組みは、2011年に地域連携室の職員が受講したことから始まる。当時、ドクターカーの運用自体は行われていたものの、運転手を務めていたのは同室職員。緊急走行に関する体系的な教育環境が院内になかったことから、外部の専門機関である同研修所での課程を受講した。



リニューアルしたドクターカーと医師、看護師、救急救命士


出動要請に対し、全力で駆け出す救急救命士

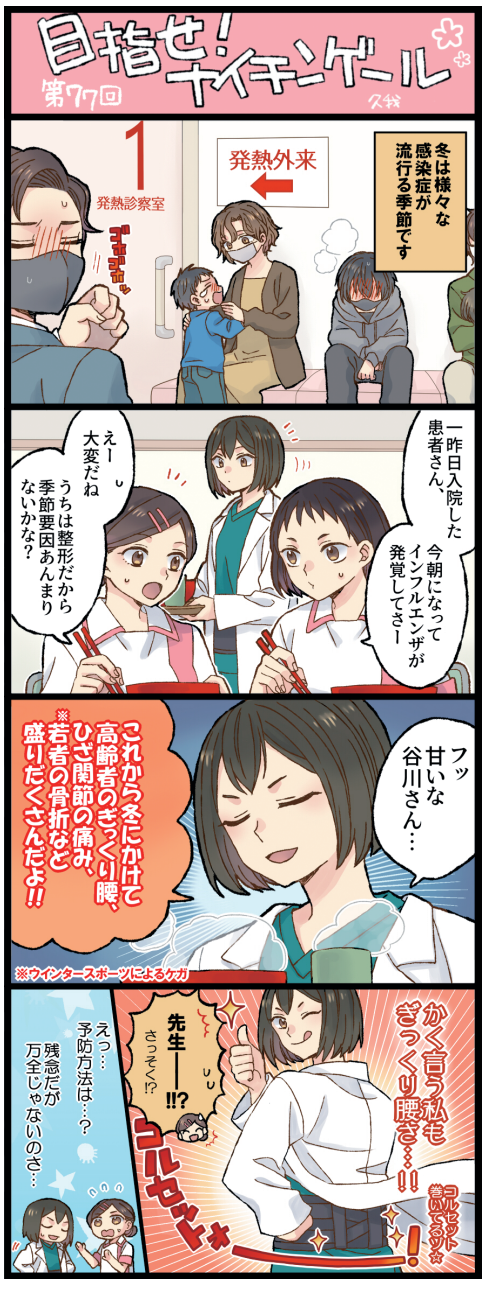

より一層の安全運動を誓う大城吉則院長（中央）


感謝状を受け取る大城院長（右）

その後、19年から救急救命士の採用を本格化。現在は救急救命士が病院救急車やドクターカーの運行業務全般を担っている。一般的な運転免許を保有していても、公道で患者さんを搬送し、サイレンを鳴らしながら緊急走行をするには、高い安全性が求められる。そのため新採用となった救急救命士は、入職後半年以内に同研修所へ派遣、4日間の課程を修了する方針だ。

こうした運転技術の習得には、専用のコースと設備を備えた環境での集中訓練が欠かせない。同課程では、時速100kmを超える高速域での旋回挙動や車体制御をはじめ、濡れた路面でタイヤが空回りして操舵が利かなくなるハイドロプレーニング現象の体験など、限界領域での車両特性を座学と実技の両面から学ぶ。

受講経験について森田尚伍・救急救命士は「一般道での教習では体験できない高速走行時の挙動や路面状況に応じた車両の限界を体感できることは、非常に大きな学びになります。また、緊急走行中は『こちらが優先される』という思い込みに陥りがちですが、研修を通じ、その危険性を強く自覚させられました。サイレンを鳴らしていても、周囲のドライバーには音楽や遮音性によって届いていない場合があります。交差点や見とおしの悪い場所では減速を徹底し、つねに危険を予測して走る意識が身に付きました」と振り返る。



こうした長年の安全運行への取り組みと継続的な人材育成が認められ、今回の感謝状授与へとつながった。森田・救急救命士は「これまで地道に訓練を継続し、無事故での運行を積み重ねてきた実績が公的に認められたことは、うれしく思います。救急車の緊急走行を自前で訓練できる施設や環境をもつ病院は少なく、当院の取り組みが周知されることで、安全運転講習への関心が高まるきっかけになればと思います」と力を込める。

多様な搬送業務に対応 救急救命士の役割拡大

同院は満床になることが多く、病床確保のため、院内で病態が安定した患者さんを地域の連携病院などへ送る「下り搬送」を積極的に進めている。その実績は昨年度が326件、今年度は4～7月までの4カ月間で161件（前年同期間比65件増）とハイペースで推移。さらに、今年度からは医療・介護施設などで病状が悪化した患者さんを、自院の救急車で迎えに行き同院へ受け入れる「自院救急搬送」にも取り組んでいる。

救急救命士が自院の外へ踏み出して初期対応を行うため、コミュニケーション能力や迅速な病態判断が不可欠となる。現在、同院には12人の救急救命士が所属し、夜間帯を含めた常時待機体制を構築。保有する2台の救急車が同時に出動する事態も日常的に発生しており、状況に応じて事務職員らと連携しながら柔軟な運行体制を整えている。下り搬送や自院救急搬送など多様な搬送業務に対応できるよう、人員の拡充も視野に入れている。

月に1回開催の救急委員会では、日々の搬送で生じた課題やヒヤリハット事例を徹底的に検証し、情報共有とプロトコルの改善を継続。

今後の展望について、森田・救急救命士は「搬送件数が急増している現状だからこそ、第一に求められるのは確実な安全運転です。走行頻度が増えればリスクも高まるため、スタッフ同士で声をかけ合い、安全意識を高く保ち続けたいです。同時に、下り搬送や自院救急搬送など多様な搬送業務に対応し、地域の医療・介護施設からより一層頼りにされる病院を目指します。救急救命士一人ひとりの技術と対応力を磨き、地域医療の安全な架け橋として貢献していきます」と意気軒高だ。

南・羽生病院部長

「ウロリフト」特色を解説 日本泌尿器科学会東部総会


「どの患者さんに、どの術式を選ぶかが重要です」と南部長

羽生総合病院（埼玉県）の南秀朗・泌尿器科部長は10月2日、第91回日本泌尿器科学会東部総会のシンポジウムに登壇し、多様化する前立腺肥大症の低侵襲手術について議論を交わした。同学会は東日本の会員を中心とした地方学術総会。

前立腺肥大症は、男性特有の臓器「前立腺」が加齢とともに大きくなって尿道を圧迫し、尿が出にくい、頻尿、残尿感といった症状を招く病気。薬で効果が不十分な場合は手術を検討する。

手術は従来、前立腺を切除・焼灼（しょうしゃく）するTURP（経尿道的前立腺切除術）が主流だったが、近年はウロリフト（経尿道的前立腺吊り上げ術）、アクアブレーション、WAVE（経尿道的水蒸気治療）、PVP（光選択的前立腺レーザー蒸散術）の4つの低侵襲手術が広まり、治療の選択肢が拡大。

シンポジウムでは「MIST、Aquablation、レーザー治療―2つ以上導入施設での実地使い分け」をテーマに、これら4つのうち2つ以上の術式を手がける医師が“すべてを満たす術式はない”ことを前提に、①症状の改善度、②効果の持続性、③性機能の温存、④体への負担――の観点から各術式の特色を解説。

南部長はウロリフトについて発表した。とくに、性機能の温存と体への負担の少なさが優れていることを挙げ、「インプラントで前立腺を押し広げて尿道を確保する手術で、5分ほどで終わります。組織を切除・焼灼しないため射精機能を損なわず、抗血栓薬を飲み続けたまま受けられます」と強調。ただし、過度に肥大した前立腺では改善効果が見込めないことや、再手術が必要となる割合がTURPに比べ高い報告があることも紹介した。

最後に、「当院ではウロリフトが適応できない患者さんにも対応できるよう、アクアブレーションも手がけています。どれが優れているかではなく、どの患者さんに、どれを選ぶかが重要です」と強調した。

徳洲会グループのウロリフト実施施設（10月30日時点）

札幌真駒内病院
羽生総合病院（埼玉県）
野田総合病院（千葉県）
成田富里徳洲会病院（千葉県）
武蔵野徳洲会病院（東京都）
茅ヶ崎徳洲会病院（神奈川県）
榛原総合病院（静岡県）
野崎徳洲会病院（大阪府）
岸和田徳洲会病院（大阪府）
生駒市立病院（奈良県）
出雲徳洲会病院（島根県）
鹿児島徳洲会病院
徳之島徳洲会病院（鹿児島県）
南部徳洲会病院（沖縄県）

救急貢献で東京消防庁から感謝状

東京西病院「年間1万件受け入れが目標」

東京西徳洲会病院は東京消防庁から感謝状を受け取った。多年にわたり救急行政に深い関心と理解を示し、その推進に積極的に協力するなど救急業務の充実発展に多大な貢献をしてきたことを評価。9月9日に院内で授与式が行われ、堂前洋院長が大久保善幸・昭島消防署長から感謝状を受け取った。


感謝状を手にする堂前院長（左）と大久保署長

大久保署長は「熱中症やコロナ禍など救急搬送が逼迫（ひっぱく）した局面でも、高い応需率で積極的に救急車を受け入れていただき大変助かっています。そのおかげで、救急隊の迅速な帰署や次の出動準備が可能となり、救急救命士の再教育への協力も含めて深く感謝しています」と謝意を表明。

堂前院長は「徳洲会の『365日24時間、救急をすべて受け入れる』というスピリッツの下、開院から20年近く取り組んできた歩みを評価していただき、うれしく思います。年間1万件を超える救急受け入れをひとつの目標に掲げており、地域や消防とさらなる連携を深め、救急医療に貢献していきます」と抱負を語った。

また、授与式の後に意見交換を行い、堂前院長は地域の救急搬送の現状や今後の広域的な医療構想、災害拠点病院のあり方などに言及。「行政や消防と実態に即した連携を一層深め、地域医療の基盤強化に貢献したい」と力を込めた。